

Title	現代ドイツ語における三つの「開始」表現について : beginnen + zu不定詞、接頭辞er-および分離前綴りan-
Sub Title	Über drei Ausdrücke mit inchoativer Bedeutung im Neuhochdeutschen : beginnen + Infinitiv mit zu, Präfix er- und Verbvorsilbe an-
Author	吉村, 創(Yoshimura, So)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2003
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.20 (2003. 3) ,p.331- 350
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20030331-0331">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20030331-0331</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 現代ドイツ語における三つの「開始」表現について

— beginnen + zu 不定詞、接頭辞 er- および分離前綴り an- —

吉村 創

## 1. はじめに

現代ドイツ語には、動詞を修飾してその行為・状態の「開始」の段階に叙述の焦点を当てる表現が多様に存在する。例えば Storch(1978)は、いわゆる分離前綴りの *los-*, *an-*, *ein-*, *auf-* および接頭辞の *er-*, *ent-* を、結び付く基礎動詞の表す行為・状態の「開始」を意味する例として挙げている<sup>1)</sup>。また Lichterowa(1986)は、*beginnen* や *anfangen* などの動詞を「開始」を意味する言語表現として考察している<sup>2)</sup>。また後者の文献においては、従属接続詞 *als*, *wenn*, *bis* に導かれた副文の中にも主文の動詞の「開始」を表す例があるとして分析され、また *müssen* + 不定詞、*lassen* + 不定詞のような述語構文や、*plötzlich*, *sofort*, *auf einmal* のような副詞句の中にも「開始」を意味する言語表現である場合が認められると主張される<sup>3)</sup>。これらの言語表現は、直観的にはすべて「～し始める」と訳すことのできる、同じ意味を示す表現であると考えられる。しかし「言葉の意味と形の間には一対一の対応がある」と Bolinger も言う通り<sup>4)</sup>、言語形式が異なればそれぞれの形式の間に何らかの意味的な差異が認められるのではないかと、との疑問が生じるのも自然である。果たしてこれらの言語表現の間には意味・機能的な差異が存在するのか。本論はこの疑問を検討すべく、これら「開始」表現の代表的なものとして、動詞 *beginnen* が共起する *zu* 不定詞の表す行為・状態の「開始」を表す例、また接頭辞 *er-* および分離前綴り *an-* が結びつく基礎動詞の表す行為・状態の「開始」を表す例を分析の対象とし<sup>5)</sup>、それぞれの「開始」表現が用いられた文例を現代ドイツ語によって書かれた小説および雑誌から収集し、それらの文例の分析によって各々の「開始」

表現の意味・機能的な特徴を比較・考察する。

## 2. 「開始」表現研究の概観

従来このような「開始」表現は、Aktionsart の理論に則って研究されてきた。Aktionsart とは、平均的な定義づけとしては「動詞によって表現された出来事の進行の仕方や段階づけ」<sup>6)</sup>に注目して動詞を分類する理論であると説明できるであろうが、その分類法はそれぞれの研究者によって様々であり、意見の一致を見ていない。しかし、Aktionsart の理論における時間的な内容による動詞の分類に関しては、動詞の表す行為・状態が時間的な限定を含む perfektiv (完了相) と、そのような時間的な限定を含まない imperfektiv (未完了相) に大きく二分されるのが一般的であると考えられる。そして、その前者の分類に、出来事の終結、結果を表す resultativ とならんで、出来事の「開始」を表す inchoativ が下位区分されるのが通例である。

しかし、Aktionsart の理論における「開始」表現に関する先行研究を概観すると、それぞれの「開始」表現の間に意味・機能の差異を認める研究は少なく、むしろ inchoativ の分類のもとに「開始」表現を一様にまとめてしまう傾向が見受けられる。もっとも、「開始」の様態を区別する方法として、「ある状態から別の状態への漸次的な移行の開始」を表す inchoativ<sup>7)</sup>と「ある出来事の突然の開始」を表す ingressiv の概念が区分される<sup>8)</sup>事があるが、この区分が実際の「開始」表現にどの様に現れているかを分析した文献は少ない。むしろ inchoativ と ingressiv を併記して統一した分類とする場合が目立って見いだされる<sup>9)</sup>。両者の間に区別がなされている場合も、Tschirner(1991)のように „werden + 形容詞“ で置き換えられる形容詞起源の動詞のみを ingressiv の分類に区分し、その他の「開始」表現は一括して inchoativ の分類に区分する<sup>10)</sup>というような、個々の「開始」表現の区別が明確にならない分類が多い。

Aktionsart の理論が、個々の「開始」表現の間の意味・機能の差異を重視しなかった原因の一つは、この理論のドイツ語研究への応用過程にあると思われる。この理論は本来、「開始」などの時間的・様態的な意味を表す接頭辞が形態論的に確立しているスラヴ諸語の研究に適用されたもので

あり<sup>11)</sup>、そのような形態論的な基盤のないドイツ語にこの理論が応用された際に、意味論的な「開始」概念しか存在しないドイツ語において形式的な「開始」表現の基盤を求めた Aktionsart の理論が「開始」表現を一様なものとして統一しようとしたことは、当然の成り行きであったとも言える。よって、本論で試みるような研究を行う際には、Aktionsart の理論における研究成果を踏まえると同時に、また異なった観点からこれらの表現を分析することが必要である<sup>12)</sup>。

言語の「意味」という現象は、言語内の要素のみを手掛かりとするいわゆる形式的な考察のみではその実態を把握できないものである。Lyons(1977)が述べる通り、「語や文の意味は言語がコミュニケーションの状況において使用されることにより学習、維持され」るものであり、「その言語の話し手がこれらの語や文の使用の際に意味することを無視しては理論的にも説明できないし、経験的にも証明できない」ものである<sup>13)</sup>。また Schwarz (1992)は「ある言語の意味的構成要素はその内容構造を概念体系から、その形式構造を言語体系から受け取る」<sup>14)</sup>というモデルを立て、言語の「意味」という現象が単に言語体系内部の現象ではなく、一般的な概念構造とも関わるものであるとする全体論的な理論を展開している。そして、その様な性格を示す「意味の分析の経験論的な出発点は常に語用論となる」<sup>15)</sup>と述べている。「意味」という現象が生じるのは言語を使用する場においてであり、「意味」の研究を行う際には言語使用の諸条件を調べる事が不可欠である。

本論でもこのような観点を重視し、それぞれの「開始」表現が実際に用いられる際のコンテクストを分析の参考にするため、現代ドイツ語によって書かれた小説および雑誌<sup>16)</sup>から収集した文例を基にして個々の「開始」表現の意味の分析を行う。実際の文例を基に言語表現の分析を行う場合、それぞれの言語表現の使用者がいわゆる規範的な言語使用からは外れた使用を行うこともあり、ある言語表現の「意味」を単純化して統一的に説明することが極めて困難になる場合がよく生じる。実際の言語使用は、規範的で折り目正しい用法に縛られない、フレキシブルなものである。しかし、個々の言語表現には、その表現が用いられる諸文例においてある傾向が見いだされ得るものであり、その傾向こそがその言

語表現の示す実際の生きた「意味」であると考えられる。本論では、このような諸表現の示す「意味」の傾向を手掛かりに、三つの「開始」表現の比較・分析を試みる。

### 3. *beginnen* + *zu* 不定詞

まず始めに、動詞 *beginnen* が *zu* 不定詞と共起して、その *zu* 不定詞である動詞が示す行為・状態の「開始」の段階に叙述の焦点を当てる場合を考察する。清水(1996)はこの構文に現れる *zu* 不定詞が「『恒常性をもたない未完了相』あるいは『瞬間的でない完了相』というアスペクトをもつ」と述べ、それらの動詞を「『瞬間的性質をもつ完了相』へと転じること」が *beginnen* の機能であると主張する<sup>17)</sup>。次に挙げる文例は、このような *beginnen* の機能を想定する根拠となるような文例である、と一見考えられる。

- (1) Mein Ehemann sagte, er sähe keine andere Möglichkeit, als sich eine eigene Wohnung zu suchen und künftig allein zu leben, worauf das Kind zu weinen begann. (Maron S.83 L.3-6)

「私の夫は言った。自分だけの住居を探して、今後は一人で暮らすより他に方法はないと。それを聞いて子供は泣き始めた。」

- (2) Umzingelt von einem unerträglichen Lärm, beginne ich zu laufen. (Jenny S.111 L.32-S.112 L.1)

「我慢できない騒音に囲まれて、私は走り始める。」

- (3) Mitte Dezember wurde es kalt und begann zu schneien. Der Schnee blieb nicht liegen, die Straßen waren dreckig und glitschig. (Hein S.172 L.8-10)

「十二月の半ば、寒くなり、雪が降り始めた。雪は積もらず、道はぬかるみ、滑りやすかった。」

文例(1)は *weinen* 「泣く」、文例(2)は *laufen* 「走る」、そして文例(3)は *schneien* 「雪が降る」が *zu* 不定詞という形で *beginnen* と共起する例である。*weinen*, *laufen* および *schneien* は「開始」「終結」といった時間的な限定を

含意せず、行為が継続して進行される事を表す「未完了相」の Aktionsart に分類される動詞である。それらの動詞が *beginnen* によって修飾されることにより、それらの行為の「開始」の段階に叙述の焦点が当てられ、全体として「完了相」の様相を示すことになる。よって、これらの文例においては、*beginnen* が共起する動詞を「瞬間的性質をもつ完了相」へと転じ、行為が実現していない段階から実現した段階への「移行 (Übergang)」の瞬間を表現していると解釈する事ができる。

しかし、*beginnen* が表す様相は、単なる瞬間的な「移行」なのであろうか。次の諸例を分析する。

- (4) Luciano hält die Bierdose vor den Mund und beginnt wie in ein Mikrofon hineinzusingen. Völlig falsch und mit heiserer Stimme, und ich lache ihn im Sessel sitzend lauthals aus, was ihn nicht davon abhält, die Stimme anzuheben und immer lauter weiterzusingen. (Jenny S.57 L.29-S.58 L.1)

「Luciano はビール缶を口にあて、マイクのようにして歌い始める。完全に間違っ、ますますしゃがれ声になって。私は肘掛け椅子に座ったまま声を限りに笑い飛ばす。それは彼を妨げることなく、声を高め、ますます大きな声で歌い続ける。」

- (5) Er [...] nahm sein Notizbüchlein aus der Tasche und begann darin zu blättern, [...] Er blättert in seinem Notizbüchlein und fuhr fort: [...] (Ende S.59 L.5-23)

「彼はメモ帳をカバンから取り出すと、パラパラとめくり始めた。彼はメモ帳をめくり、さらに話し続けた。」

- (6) Zugleich frage ich mich und habe mich schon damals zu fragen begonnen: Was sollte und soll meine Generation der Nachlebenden eigentlich mit den Informationen über die Furchtbarkeiten der Vernichtung der Juden anfangen? (Schlink S.99 L.22-25)

「同時に私は自問する。すでに当時間い始めていたのだが。後に生きる私の世代はそもそもユダヤ人根絶の恐ろしさについての情報に

どう対処すべきだったのか。また今どう対処すべきなのか。」

文例(4)において *beginnen* が「開始」の意味をもって修飾するのは、*(hinein)singen* 「歌う」という行為であるが、続く文において *weilersingen* 「さらに歌う」という動詞が用いられることによって、同じ行為の継続が表現されている。また文例(5)における *blättern* 「(ページを)パラパラとめくる」という行為においても、後続する文に再び同じ動詞 *blättern* が用いられることから、この行為が「開始」された後も継続されていることが理解できる。これらの文において書き手が意図していることは、*beginnen* と共起する *zu* 不定詞の表す行為が、後続する文において述べられる同じ行為の経過と対比して表現されるという事である。*beginnen* + *zu* 不定詞の構文が用いられた部分を読んで読者がイメージするのは、歌の数節の歌い始め、メモ帳のめくり始めという、行為の「最初の段階」であり、後続する文においてそれらの行為の経過が描写されるに及んで、そのイメージが確かなものになると考えられる。このように *beginnen* は、単に行為が実現していない段階から実現した段階への瞬間的な「移行」を表現するのみではなく、ある行為に対して、ある程度の時間の幅をもった「最初の段階」を表現することができるのである。文例(6)も、*beginnen* の機能に対するこのような解釈を支える文例である。ここでは、*beginnen* が現在完了の時制で用いられており、*fragen* 「問う」という行為が「開始」されたのが過去であることが理解される。そして、その前の節において同じ動詞 *fragen* が現在形で用いられており、このことからこの「問う」という行為がすでに何度も行われていることが分かる。つまりこの文例において *beginnen* は一回きりの行為の「開始」の段階を表すのではなく、「反復」される行為の一回目という意味における「開始」を表すのであり、その一回目の行為は当然時間的な幅をもつ行為である。よって、文例(6)も *beginnen* が行為の「最初の段階」を表す例であると解釈できる可能性が認められる。

さらに、次の文例(7)および(8)における、*beginnen* が *werden* 「～になる」と共起する例は、*beginnen* が行為の「最初の段階」を表すとは解釈できない例である。

- (7) Sie hatte mich schlecht behandelt, und ich hatte sie zur Rede stellen wollen. Aber ich war gar nicht an sie herangekommen. Statt dessen hatte sie mich angegriffen. Und ich begann, unsicher zu werden. Hatte sie vielleicht recht, nicht objektiv, aber subjektiv? (Schlink S.48 L.21-25)

「彼女は私を冷遇した。それで私は彼女に釈明を求めようと思っていた。しかし私は全く彼女に近付けなかった。それどころか彼女は私を攻撃した。それで私は自信がなくなり始めた。ひょっとしたら彼女が正しかったのか、客観的にではなく主観的に。」

- (8) Im selben Augenblick, wo der Verurteilte die Zigarre nicht mehr hatte, begann er rasch immer durchsichtiger und durchsichtiger zu werden. Auch sein Geschrei wurde dünner und leiser. (Ende S.118 L.26-29)

「裁かれた者が葉巻を持たなくなった瞬間、彼は急激にだんだん透明になり始めた。彼の叫び声もか細く小さくなっていった。」

werden はそもそもある状態から別の状態への「移行」を表す動詞である。文例(7)においては、unsicher werden 「自信が無くなる」という状態の「移行」が beginnen によって修飾されるが、その際 beginnen が表しているのはそのような状態「移行」の瞬間的な生起ではない。beginnen が使用された意図は、この状態「移行」が起こりかけた段階、すなわち「私」の心に自信の揺らぎが兆した段階の描写である。そのような解釈は、続く文中で vielleicht 「ひょっとしたら」という副詞が用いられていることにより支持され得る。「私」の気持ちは完全に「自信が無くなる」状態へと「移行」したのではなく、まだ気持ちの変化の「最初の段階」にあるのである。また、文例(8)においても、共起する比較級の表現 durchsichtiger によって、状態の変化が徐々に行われることが表現されていると理解され得る。

このような観点から beginnen + zu 不定詞という構文の使用文例を検討すると、次のような例も単に行為がなされていない段階からなされた段階への瞬間的な「移行」を表すのではなく、行為の「最初の段階」を想起させる例であると解釈される。



- (9) Der Streit hat unser Verhältnis zueinander inniger gemacht. Ich hatte sie weinen sehen, Hanna, die auch weinte, war mir näher als Hanna, die nur stark war. Sie begann, eine sanfte Seite zu zeigen, die ich noch nicht gekannt hatte. Sie hat meine geplatzte Lippe, bis sie heilte, immer wieder betrachtet und zart berührt. (Schlink S.56 L.27-S.57 L.2)

「そのけんかは私たちの関係をより親密なものにした。私は彼女が泣くのを見た。泣くこともする Hanna は私にとっては、強い面しか見せない Hanna よりも近しく感じた。彼女は私がまだ知らなかった優しい面を見せ始めた。彼女は私の裂けた唇を、治るまで、何度も見て優しく触れた。」

- (10) Allmählich wich der Schock. Allmählich lockerte sich der Griff der Angst, und Grenouille begann sich sicherer zu fühlen. Gegen Mittag hatte er seine Kaltblütigkeit wiedergewonnen. (Süskind S.172 L.17-20)

「徐々にショックは消えていった。徐々に不安は手を緩め、Grenouille は気を取り直し始めた。正午頃には彼は冷静さを取り戻した。」

また、この観点から文例(2)などを見直すと、この例もまさに足を数歩動かし出した姿が想起される「最初の段階」を表す文例であると解釈することも可能となる。結論として、beginnen は、共起する zu 不定詞の表す行為・状態の「最初の段階」を表現する傾向を示す「開始」表現である、と特徴付けることができる。

#### 4. 接頭辞 er-

接頭辞 er-は多義的な前綴りであるが、その意味・機能による分類の試みの際には、分類の一つとして「開始」の用法を示す分類が設けられることが多い。そして、その「開始」の分類にどの er 動詞<sup>18)</sup>が含まれるかについてはそれぞれの研究の間で必ずしも意見の一致を見ないが、er-blühen「開花する」、er-zittern「震え出す」および er-klingen, er-tönen など音の響きを表す er 動詞、さらに er-glühen, er-schimmern など光の発生を表す er

動詞が「開始」の用法を示す er 動詞であると認められることが多いようである<sup>19)</sup>。まずはこれらの動詞が用いられた文例を検討し、er 動詞による「開始」表現の特徴を考察する。

- (11) Sobald das Wasser kochte, ertönte ein kurzes Pfeifen aus der Küche, und ich hörte, wie Vater den Kessel hastig vom Herd nahm. (Jenny S.6 L.7-9)

「湯が沸くやいなや台所から短くピーッという音が鳴り出した。そして私は父がやかんを急いでコンロから取り上げる様子を聞いていた。」

- (12) Hinter mir erzitterte die Luft von vorbeifahrenden Autos und einer schrill jaulenden Straßenbahn. Dann wurde es stiller, bis die nächste Welle von Fahrzeugen heran jagte und an mir vorbeiströmte. (Hein S.55 L.1-4)

「私の後ろで、通り過ぎる車やけたたましく音をたてる市街電車によって空気が震え出した。そして少し静かになったが、また次の車の波が近付いて私の傍らを流れ過ぎていった。」

- (13) Die Münder klappten zu, die tausend Augen belebten sich wieder. Und dann erscholl es in einem einzigen donnernden Wut- und Racheschrei: »Wir wollen ihn haben!« (Süskind S.289 L.22-25)

「口は閉じ、千の目は再び活気づいた。それから一斉にとどろくような怒りと復讐の叫びが鳴り響いた。『彼を引き渡せ!』」

- (14) Als das Sternenpendel sich nun langsam immer mehr dem Rande des Teiches näherte, tauchte dort aus dem dunklen Wasser eine große Blütenknospe auf. Je näher das Pendel kam, desto weiter öffnete sie sich, bis sie schließlich voll erblüht auf dem Wasserspiegel lag. (Ende S.161 L.26-29)

「星の振り子が今やゆっくりと池の縁にだんたんと近付くと、その暗い水から大きなつぼみが浮かび上がった。振り子が近付くにつれて花はさらに開き、ついに完全に開花して、水鏡の上に咲いた。」

文例(11)における er-tönen は、基礎動詞 tönen 「音をたてる」という現象の「開始」の段階に接頭辞 er-が叙述の焦点を当てて表現する動詞であり、文例(12)の er-zittern においても、接頭辞 er-の役割は基礎動詞 zittern 「震える」という現象の「開始」を表すことである。両例において、接頭辞 er-は、結び付く基礎動詞の表す現象が起こっていない段階から、それが起こった段階への「移行」を表す表現であると判断できる。しかし、beginnen の場合と同じく、この表現が現象の「最初の段階」を表すと解釈することはできるのであろうか。

文例(13)の er-schallen は、同じく基礎動詞 schallen 「鳴る」という現象の「開始」を接頭辞 er-が表しているのであるが、その現象の「最初の段階」が表現されていると断言するのは難しい。コンテクストから解釈すると、この文章は「彼を引き渡せ」というせりふが何人かの口から散発的に上がる「最初の段階」よりも、大勢の口から声が発されこの場いっぱいには声が響き渡っている状況を想起させる。さらに文例(14)の er-blühen に至っては、この er 動詞が blühen 「咲く」という現象の「最初の段階」を表現しているという解釈は、共起する schließlich 「ついに」および voll 「完全に」という副詞によって不可能となる。この er 動詞は現象が実現していない状態からすっかり実現した状態への「移行」を表しており、基礎動詞の表す現象が最も充実して実現されている段階を表現していると解釈できる。つまり、「開始」表現として用いられる接頭辞 er-は、beginnen とは異なり、ある現象の「開始」の段階から、その現象がすっかり実現しきった段階までを含めて表現する傾向にあると考えられる。

このことは、形容詞に起源をもつ er 動詞、すなわち「形容詞 + werden (machen)」という表現と置き換えることのできる er 動詞についても主張できることなのであろうか。先行研究の中には、この形容詞起源の er 動詞をも「開始」の用法を示す動詞として分類する研究が多いが、これら形容詞起源の er 動詞は動詞起源の er 動詞とは別の分類として取り扱われている<sup>20)</sup>。また Kühnhold(1973)においては両者の区別は明確であり、動詞起源の er 動詞を「開始(Einsetzen)」、形容詞起源の er 動詞を「移行(Übergang)」の意味を表す用法であるとして区分している<sup>21)</sup>。しかし、この区別は妥当なものであろうか。本論は動詞を修飾してその行為・状態の「開始」の段

階に叙述の焦点を当てる er 動詞を考察の対象とするため、ここでは語源的には形容詞が基であるものの、接頭辞 er-と結ぶ基礎動詞の部分が独立した動詞としても用いられる er 動詞を考察の対象とする。

- (15) In der Küche knipste ich das Licht an, setzte mich an den Tisch und umklammerte die noch warme Kaffeetasse. Suchte den Rand nach den braunen, eingetrockneten Flecken ab, das letzte Lebenszeichen, wenn er nicht mehr zurückkehrte. Allmählich erkaltete die Tasse in meinen Händen, unaufhaltsam drang die Nacht herein und breitete sich in der Wohnung aus. (Jenny S.6 L.28-S.7 L.2)

「台所の明かりをつけ、テーブルにつき、まだ温かいコーヒーカップをはさみ込んだ。茶色く乾いたしみに痕跡を、もし彼がもう帰って来なければ最後の生きていたしるしとなるものを探した。カップは私の手の中で徐々に冷め始め、夜は刻々と押し入り、住まいの中に広まっていった。」

- (16) Er erwachte vor Angst und dachte: das neue Leben. (Walser S.74 L.12-13)

「彼は不安のあまり目が覚め、そして考えた。新しい人生のことを。」

- (17) Und sie küsste sie [=Schildkröte] mehrmals auf die Nase. Die Buchstaben auf dem Panzer der Schildkröte erröteten sichtlich, als sie antwortete: »MUSS DOCH SEHR BITTEN!« (Ende S.230 L.8-10)

「そして彼女は亀の鼻に何度もキスをした。亀の甲羅の文字は『まあなんてこと』と答えたとき、目に見えて赤くなった。」

文例(15)は基礎動詞 kalten「冷める」という現象の「開始」に叙述の焦点を当てる接頭辞 er-の用いられた例である。確かにこの文例においては、副詞 allmählich「徐々に」の共起により、コーヒーカップが冷める「最初の段階」が表されているという解釈が可能である。しかし、文例(16)の er-

wachen をみると、この行為の直後に denken 「考える」という行為が続くことから、この er 動詞が表現しているのは目覚めの「最初の段階」ではなく、考えることが可能なまでにすっかり目覚めた段階であると考え方が自然ではないだろうか。さらに文例(17)における er-röten は、基礎動詞 (sich) röten 「赤くなる」<sup>22)</sup>という現象の「開始」を表すのだが、この er 動詞がこの状態変化の「最初の段階」を表すかどうかは、判断を下しにくいところである。むしろ共起する sichtlich 「目に見えて」という副詞から、かなり赤くなった段階を描写していると解釈するのが自然であると思われる。

以上の検討から、接頭辞 er-は、ある行為・状態の「開始」から、その行為・状態がすっかり実現した段階までを表現することのできる「開始」表現であると見なすことができる。そしてこの特徴は、動詞起源の er 動詞にも形容詞起源の er 動詞にも共通してみられる傾向であると考えられる。

#### 5. 分離前綴り an-<sup>23)</sup>

分離前綴り an-も多義的な前綴りである。例えば Kühnhold(1973)においては4種類の意味区分が設けられており、その分類の一つに「開始 (Beginn)」の意味を表す用法が立てられる<sup>24)</sup>。分離前綴り an-が、結びつく基礎動詞の表す行為・状態の「開始」の段階に叙述の焦点を当てる例としては、次のようなものが挙げられる。

(18) Die Bahn hielt. [...] Als ich ausstieg, war mir, als sähen sie mir lachend zu.

Aber ich war nicht sicher. Dann fuhr die Bahn an, [...] (Schlink S.46 L.21-24)

「列車は停止した。私が降りたとき、私には彼らが私のほうを笑いながら見たような気がした。しかし私は確信が持てなかった。そして列車は動き出した。」

(19) Der Vorführer hatte den Film bereits anlaufen lassen, als wir an der Kasse standen. (Hein S.138 L.9-10)

「私たちがチケット売り場に並んでいたのに、映写技師はすでに映

画を上映し始めていた。」

文例(18)においては、基礎動詞 *fahren* の表す「(乗り物が) 動く」という行為が、また文例(19)においては *den Film laufen lassen* という動詞句の表す「映画を上映する」という行為が「開始」される段階を描写する手段として、分離前綴り *an-* がそれぞれの動詞に付加されている。これらの文章を読んだ読者が想起するのは、単に行為が実行されていない状態から実行された状態への「移行」ではなく、列車が駅を離れて出発する、また映画の始めの部分を上映する、それぞれの行為の「最初の段階」であると考えられる。よって、これらの文例に現れる分離前綴り *an-* は、動詞 *beginnen* と同じ特徴を示す「開始」表現であると見なすことができる。

しかし、「開始」の意味を表す分離前綴り *an-* を用いた文例には、次のようなものも見うけられる。

- (20) So wird auch im Katalog des Versands eingeräumt, dass die Blechkannen aus Südasien innen etwas angerostet sind und [...] (DER SPIEGEL S.167 ur.7-10)

「それで通信販売カタログにも次のことを認める記載がある、南アジア製のブリキポットは中がいくらか錆びかけていると。」

- (21) Diese Fragen können hier jedoch nur andiskutiert und nicht weiter verfolgt werden. (Storch(1978 a.a.O.) S.137 L.20-21)

「これらの問題はここでは少し論じるにとどめ、更なる追究は控える。」

文例(20)における *an-rosten* は、基礎動詞 *rosten* の表す「錆びる」という現象の「開始」の段階を分離前綴り *an-* が表している例であるが、「錆びる」という現象は徐々に進行してその度合いを増していく現象であり、その現象の進行の「最初の段階」を *an* 動詞が意味しているとも解釈できる。つまり、この *an* 動詞は現象が部分的に遂行された段階である事を表すと説明され得るものであり、それは、*an-rosten* に対する辞書の意味記述が „zu

rosten beginnen“ 「錆び始める」 とならんで „ein wenig rostig werden“ 「少し錆びる」 とされている事からも理解できる<sup>25)</sup>。文例(21)の an-diskutieren も同様の解釈を許容し、特に nur 「ただ」という副詞の共起から、「論じ始める」と訳すよりも「少し論じる」と訳すほうが適切な an 動詞の例である。

このように、基礎動詞の表す行為・状態の「部分的遂行」を表す an 動詞の用法が存在することから、「開始」の意味を表す an 動詞の扱い方には、従来様々な意見が提出されてきた。例えば Stiebels(1996)は、文例(18)および(19)における an 動詞のような「開始」の用法を表す an 動詞は非生産的であるとし、生産的な「部分性の強調 (Partialmarkierung)」を示す an 動詞のみを考察の対象とする<sup>26)</sup>。また、このような特徴を示す an 動詞を inchoativ の Aktionsart を示すものとは認めない研究も存在し、Weisgerber (1958)はこれらの an 動詞を „in Gang“ という意味特徴の下に分類し<sup>27)</sup>、Steinitz (1981)は別種の Aktionsart の分類を立てている<sup>28)</sup>。しかし、an 動詞が用いられた文例を一つ一つ分析すると、岡本(1999)で主張されるように、「『部分的遂行』の意味は、『開始』の意味と密接な関係がある」と理解するのが妥当であると考えられる<sup>29)</sup>。なぜなら、文例(20)における an-rosten が辞書記述に両方の意味を併記して持ち合わせているように、「開始」と「部分的遂行」の意味は互いに関連のあるものであり、両者の区別はコンテキストによるものと考えられる場合も存在するからである。ただし、本論ではこの用法を示す an 動詞が「部分的遂行」の意味を越えてさらなる意味的な発展を示すものであると分析する。次の文例をもって、そのことを検討する。

(22) Während Mama bei der Gewissenserforschung war—sie blätterte im Beichtspiegel wie über Geschäftsbüchern, den Daumen anfeuchtend, eine Steuererklärung erfindend—, [...] (Grass S.168 L.10-13)

「ママが良心の究明をしていた間、—ママはまるで指を湿らせて大福帳をめくりながら納税申告をでっち上げるかのように告解心得書をめくっていたのだが—」

(23) Wie der Arzt, um zu prüfen, ob es abgestorben ist, ein Glied ansticht, so stech

ich mein Gedächtnis an. (Wolf S.230 L.21-23)

「医者が、壊死しているかを確認するために四肢をちょっと刺してみるように、私は自分の記憶を一刺しする。」

(24) Er stieß mich mit der Schuhspitze an: (Hein S.77 L.25)

「彼は私を靴の先で突いた。」

文例(22)における an-feuchten は、基礎動詞 feuchten の表す「湿らせる」という行為の「部分的遂行」を分離前綴り an-が表すという解釈から、その行為が「軽度」に遂行される事を表すという解釈が生じる例である。文例(23)の an-stechen も、そのような「軽度」の行為を表す例であると読み取れる。そのような行為の「軽度」の遂行という解釈は、文例(24)における an-stoßen において顕著である。基礎動詞 stoßen の表す「突く」という行為に比べ、an-stoßen は人の肩などを小突く、ビリヤードの球をキューで突く、乾杯のためにグラスを合わせる、といった「軽度」の行為を表す場合に用いられる。これらの例において分離前綴り an-は、Aktionsart の分類としては、行為の程度が緩和されることを表す deminutiv に分類されると見なす方が適切である。

分離前綴り an-がこのような特徴を示すのは、この前綴りの本来の意味が空間的なものであることが原因の一つであると考えられる。その意味とは「表面との接触」であり、この意味は同じ語源をもつ前置詞 an にも認められる。一般的に分離前綴りは非分離前綴りよりも固有の意味を保つ度合いが高く<sup>30)</sup>、そのことが分離前綴り an-という「開始」表現を特徴付けることになるのであろう。

## 6. 終わりに

本論では、現代ドイツ語における三つの「開始」表現の間の意味・機能的な差異を、実際の文例から考察し、分析した。この調査によりそれぞれの「開始」表現には独自の意味的な特徴が認められることが確認されたが、調査の完成にはこの三つの「開始」表現を検討するだけでは十分ではなく、冒頭に挙げた多様な「開始」表現を一つ一つ検討する必要がある。また、



それぞれの「開始」表現が共起できる動詞には制限があり、例えば *fahren* という動詞は分離前綴り *an-* と共起して「開始」の意味を示すことができるが、接頭辞 *er-* と共起すると「経験する」という全く異なった意味を表すことになる。このような現象を詳察することが「開始」表現の研究にとって不可欠であり、今後の課題となるものである。

注

- 1) Storch, Günther: Semantische Untersuchungen zu den inchoativen Verben im Deutschen. Braunschweig 1978, S.112-160.
- 2) Lichterowa, Bronislaw: Zum sprachlichen Ausdruck der Eingangsphase verbaler Handlungen in der deutschen Gegenwartssprache (unter dem Aspekt des Fremdsprachenunterrichts). In: Wissenschaftliche Zeitschrift der Wilhelm-Pieck-Universität Rostok. 35.Jg. 1986, S.80-83. hier S.81.
- 3) Lichterowa: a.a.O., S.82.
- 4) Bolinger, Dwight: Meaning and Form. London 1977.
- 5) Kühnhold(1973)においては、分離前綴りの中では *an-* が、接頭辞の中では *er-* が「開始」を表す例数が最も多い。Kühnhold, Ingeburg: Deutsche Wortbildung. Typen und Tendenzen in der Gegenwartssprache 1. Das Verb. Düsseldorf 1973, S.144-154.
- 6) Helbig, Gerhard und Buscha, Joachim: Deutsche Grammatik. 19. Aufl. Leipzig 1999, S.72.
- 7) これが狭義の意味における inchoativ である。
- 8) Bußmann, Hadumod: Lexikon der Sprachwissenschaft. 2.Aufl. Stuttgart 1990, S.329 und 338.
- 9) DUDEN: 4.Grammatik. 6.Aufl. Mannheim 1998, S.91. ; Helbig und Buscha: a.a.O., S.72.
- 10) Tschirner, Erwin: Aktionalitätsklassen im Neuhochdeutschen. New York 1991, S.67-68.
- 11) François, Jacques: Aktionsart, Aspekt und Zeitkonstitution. In: Schwarze, Christoph und Wunderlich, Dieter: Handbuch der Lexikologie. Königstein 1985, S.229-249. hier S.229.
- 12) このような状況の中で注目すべきは Storch (a.a.O.)における「開始」表現の研究である。この研究においては、本論の冒頭で挙げた各々の「開始」表現が Aktionsart の理論に則って分析されてはいるが、これらの

「開始」表現が共通した inchoativ という意味要素を一様に示すのではないと主張されている(Storch: a.a.O., S.1.)。しかし、その分類は例えば接頭辞 er- を4つの異なったグループに区分し、それらのグループの一つには分離前綴り ein- が、また別のグループには分離前綴り auf- の一部分が同じ意味・機能を示す表現として同グループに分類されてしまっており、個々の「開始」表現が示す意味・機能の間の差異を見いだすことを困難にしている。ここにおける分類は、それぞれの「開始」表現を横断した、動詞一つ一つの意味を重視した分類なのである。

- 13) Lyons, John: Semantics 1. Cambridge University Press 1977, S.4
- 14) Schwarz, Monika: Kognitive Semantiktheorie und neuropsychologische Realität. Tübingen 1992, S.98.
- 15) Ebd., S.25.
- 16) 使用したテキストのうち、本論で文例を挙げたテキストの出典は以下の通り。出典は著者名とページ数、行数で表す。

Grass, Günter: Die Blechtrommel. in: Günter Grass Werkausgabe: Band 2. hrsg. von Volker Neuhaus. 10 Bde. Darmstadt 1987 (初版は 1959 年)

Ende, Michael: Momo. Stuttgart 1993 (初版は 1973 年)

Walser, Martin: Ein fliehendes Pferd. Frankfurt am Main 1978

Hein, Christoph: Der fremde Freund. Berlin 1982

Wolf, Christa: Cassandra. in: Christa Wolf Werke 7. München 2000 (初版は 1983 年)

Süskind, Patrick: Das Parfum. Zürich 1985

Schlink, Bernhard: Der Vorleser. Zürich 1995

Maron, Monika: Animal triste. Frankfurt am Main 1996

Jenny, Zoé: Das Blütenstaubzimmer. Frankfurt am Main 1997

DER SPIEGEL: Das deutsche Nachrichten-Magazin. Hamburg 1999 Nr.45 (ページ数の後の記号は欄と行数を表し、l,m,r,o,u はそれぞれ左、中、右、上、下の欄を、その後の数字は行数を表す。)
- 17) 清水朗「中高ドイツ語構文 „beginnen+Inf.“ について」(一橋論叢 第115巻 第3号) 1996, S.637-651. hier S.638.
- 18) 本論では、接頭辞 er- を伴う複合動詞のことを「er 動詞」とよび、分離前綴り an- を伴う複合動詞のことを「an 動詞」とよぶ。
- 19) Izumiya, Kanako: Verbalpräfix ‚er-‘—in semantischer, morphologischer und syntaktischer Hinsicht— (慶応義塾大学独文学研究室『研究年報』2号 1985,S.124-107). hier S.122-117 ; Kühnhold: a.a.O., S.284 ; Storch: a.a.O., S.126-139.
- 20) Izumiya: a.a.O., S.120-117 ; Storch: a.a.O., S.175-176.

- 21) Kühnhold: a.a.O., S.284 und 293.
- 22) er-röten は、接頭辞 er-の付加により他動詞用法をもつ基礎動詞が自動詞に転換される。本論は「開始」表現の意味分析に考察を絞るため、このような統語論的な項交替の現象は詳察しない。
- 23) 本論では、動詞の表す行為・状態の「開始」に叙述の焦点を当てる言語表現を考察の対象とするため、an-knipsen「スイッチを入れる」など、基礎動詞の表す行為によって物事を「開始」させることを表す an 動詞は検討しない。
- 24) „Kontakt bzw. Annähern“, „Beginn“, „Zielzustand“, „Intensivierung“の4種類。Kühnhold: a.a.O., S.144-145.
- 25) DUDEN. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache. 10 Bde. 3. Aufl. Mannheim 1999, Bd.1 S.238.
- 26) Stiebels, Barbara: Lexikalische Argumente und Adjunkte. Berlin 1996, S.72 und S.78-82.
- 27) Weisgerber, Leo: Verschiebungen in der sprachlichen Einschätzung von Menschen und Sachen. Köln 1958, S.133.
- 28) Steinitz, Renate: Der Status der Kategorie „Aktionsart“ in der Grammatik (oder: Gibt es Aktionsarten im Deutschen?). Akademie der Wissenschaften der DDR 1981, S.85.
- 29) 岡本順治「AN-不変化詞動詞に見られる部分的遂行の含意」(ドイツ語の統語構造と意味構造のインターフェイスに関する通時論的・共時論的研究 平成8年度～平成10年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書) 1999, 30 ページ。
- 30) Flämig, Walter: Zur Funktion des Verbs. Tempus und Temporalität—Modus und Modalität—Aktionsart und Aktionalität. In: Probleme der Sprachwissenschaft. The Hague 1971, S.253-289. hier S.280-281.

(慶應義塾大学大学院後期博士課程在学中)

## Über drei Ausdrücke mit inchoativer Bedeutung im Neuhochdeutschen

— *beginnen* + Infinitiv mit *zu*, Präfix *er-* und Verbvorsilbe *an-* —

YOSHIMURA, So

Im Neuhochdeutschen gibt es verschiedene Ausdrücke, die den Beginn einer Handlung oder eines Zustands bezeichnen. Im vorliegenden Aufsatz sollen drei typische Ausdrücke untersucht werden, nämlich das Verb „beginnen“, das Präfix „er-“ und die trennbare Verbvorsilbe „an-“. Dem Anschein nach besitzen diese drei Ausdrücke die identische Bedeutung, nämlich „Beginn“, aber eine semantische Differenz lässt sich vermuten. Um die Unterschiede genauer zu untersuchen, werden die drei inchoativen Ausdrücke analysiert und miteinander verglichen.

In der bisherigen Forschung werden diese Ausdrücke, die den Beginn eines Vorgangs bezeichnen, in die Kategorie „inchoativ“ zusammengefasst. Inchoativ bedeutet eine Klasse der „Aktionsart“, und die Aktionsart bedeutet „eine semantische Kategorie des Verbs, die den verbalen Vorgang in seiner je besonderen Art und Weise charakterisiert.“ (Lewandowski 1994: 37) Inchoative Verben sind definiert als „solche, die die Anfangsphase eines Geschehens, den Beginn oder das Einsetzen eines Vorgangs bzw. den Eintritt eines Zustands bezeichnen.“ (Ebd.: 432) Bei den Forschungen zur Theorie der Aktionsart wird behauptet, dass verschiedene Ausdrücke das gemeinsame Merkmal „inchoativ“ haben, und die Unterschiede zwischen diesen Ausdrücken werden kaum erwähnt.

Um den semantischen Unterschied zwischen den verschiedenen Ausdrücken zu untersuchen, braucht man außer der Theorie von der Aktionsart noch andere Analyseverfahren. Es wird oft behauptet, dass bei Untersuchungen der sprachlichen Bedeutung der pragmatische Gesichtspunkt unentbehrlich ist. In diesem Aufsatz

wird die pragmatische Information, nämlich der Kontext, in dem betreffende Ausdrücke benutzt werden, für wichtig gehalten. Daher werden die Beispielsätze, in denen einer der drei inchoativen Ausdrücke benutzt wird, gesammelt und dann werden diese Ausdrücke erst analysiert.

Mit dem Verb „beginnen“ kann man ein Verb mit imperfektiver Aktionsart zum Verb mit perfektiver Aktionsart machen, und dabei stellt „beginnen“ den Übergang des noch-nicht-entstandenen Vorgangs in den entstehenden Vorgang dar (Beispielsätze(1)(2)(3)). Aber „beginnen“ bezeichnet keine punktuelle Entstehung, sondern die Anfangsphase eines Vorgangs. Diese Behauptung wird durch die Beispiele bewiesen, in denen das mit dem Verb „beginnen“ verbundene Verb erneut im folgenden Satz benutzt und die Fortsetzung des Vorgangs geäußert wird (Beispielsätze(4)(5)(6)), sowie durch die Beispiele, in denen „beginnen“ mit dem Verb „werden“ verbunden ist und daher die Anfangsphase des allmählichen Werdens bezeichnet wird (Beispielsätze(7)(8)).

Einige Verben mit dem Präfix „er-“ bezeichnen den Beginn eines Vorgangs (Beispielsätze(11)(12)(13)(14)). Aber bei genauerer Untersuchung stellt das Präfix nicht nur die Anfangsphase, sondern auch die Vollendung eines Vorgangs dar. Das Präfix bezeichnet eine zeitliche Begrenzung und ob einzelne Verben die Anfangsphase eines Vorgangs darstellen oder nicht, hängt von dem Kontext ab. Das kann man bei den von Adjektiven ausgehenden Verben mit dem Präfix „er-“ sagen (Beispielsätze (15)(16)(17)).

Die trennbare Verbvorsilbe „an-“ kann ebenfalls den Beginn des Vorgangs, den das verbundene Verb bezeichnet, darstellen (Beispielsätze(18)(19)). Die ursprüngliche Bedeutung dieser Verbvorsilbe ist eine räumliche, nämlich der Kontakt der Oberfläche. Daraus entsteht die Implikation „Partialmarkierung“, und es gibt Beispiele, die nicht mehr als inchoativ, sondern als deminutiv klassifiziert werden können (Beispielsätze(22)(23)(24)).

#### Anmerkungen

Lewandowski, Theodor: Linguistisches Wörterbuch. 3 Bde. 6. Aufl. Heidelberg 1994.